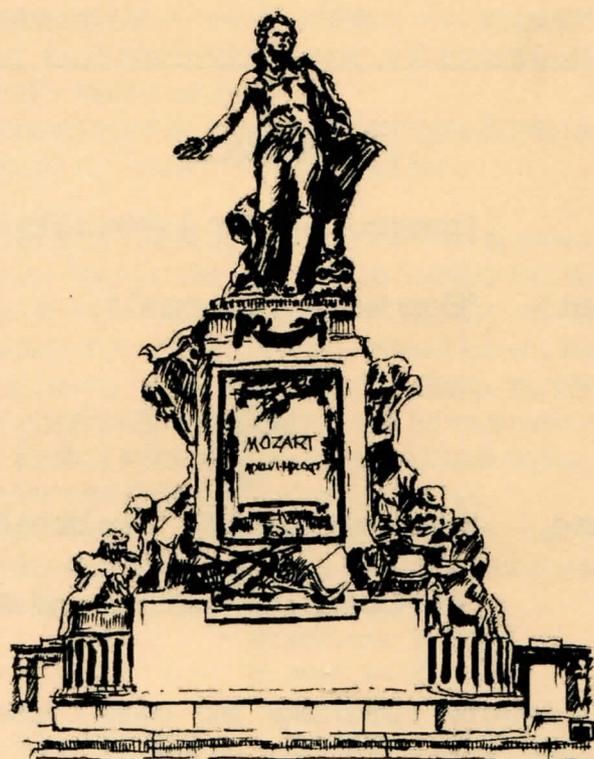


# 芦屋室内合奏団 第40回定期演奏会

Ashiya Chamber Orchestra The 40<sup>th</sup> Regular Concert



兵庫県立芸術文化センター 小ホール  
Hyogo Performing Art Center, Recital Hall

2007年 1月 14日(日)  
14 January, 2007 (SUN)

開場 13:30 開演 14:00  
Open 13:30 Start 14:00

昭和40年、芦屋市浜町の橋本邸で発足した当団も、本日で40回目の定期演奏会を迎えました。

今回は、米国からクラーク大学の D. L. アパート教授をお招きしています。

これは、同教授が当団の為に作曲され、当団が第35回定期演奏会で世界に先がけて初演した「弦楽のためのエレジー」がその後評価され一昨年に至り「全米作曲家賞」を受賞の栄に浴されたのを祝し、本日再び同曲を取り上げる事とし、指揮をお願いしたところ、快く引き受けて下さったものです。

永年に亘り、相変わらず当団を暖かく見守って下さいますご来場の皆様方に、厚くお礼申し上げます。

2007年 1月 芦屋室内合奏団 団長 青柳 良  
団員 一同

PROGRAM

A. Vivaldi Concerto F-Dur Con 4 Violini e Violoncello obligato

D. L. Appert "Elegy for String Orchestra" \*



W. A. Mozart Serenade G-Dur K.525 "Eine kleine Nachtmusik"

E. Grieg "Fra Holbergs Tid" Suite i gammel stil Op.40

Conducted by Mutsuo Sakai and Donald L. Appert \*

Ashiya Chamber Orchestra

■ A. ヴィヴァルディ 4つのヴァイオリンとチェロのための協奏曲 へ長調 作品3-7 RV567

アントニオ・ヴィヴァルディ(1678-1741)は、音楽史上、協奏曲の形式を確立したこと、独奏楽器とりわけヴァイオリンの演奏技術を発展させたことに大きな功績があったとされている。残された作品は770曲を超すがその中心となるのはやはり協奏曲で450曲にも上る。ヴィヴァルディ自身がヴァイオリンの大変な名手であったようで、そのうち半数以上がヴァイオリン協奏曲である。有名な「四季」も独奏ヴァイオリンによる協奏曲である。

12曲の協奏曲からなる「調和の靈感」作品3には独奏ヴァイオリン4本を使ったものが4曲あり、へ長調のこの曲は第7番にあたり、独奏チェロを伴っている。独奏者が複数となることで、ソロと合奏の掛合いに加えて、4つのヴァイオリン、チェロのソロ同士の受渡しの妙が楽しめる。楽譜にはないが、演奏ではヴァイオリンとチェンバロによるカデンツァを加えている。

I. アンダンテ

II. アダージョ、アレグロ

III. アダージョ

IV. アレグロ

ヴァイオリン独奏 : 第1Vn 鳥丸安雄、第2Vn 戸倉啓子、第3Vn 三村誠子、第4Vn 伊藤耕平

チェロ独奏 : 鳥丸直子

## ■ D. L. アパート 弦楽のためのエレジー

ドナルド・L・アパート(1953-)は、当団コンサートマスターと親交があり、芦屋室内合奏団はこれまでに氏の作品「夢のように(In the Similitude of a Dream)」、「ガラスごしの翳(Thru a Glass Darkly)」をそれぞれ1998年、1999年に日本初演している。「弦楽のためのエレジー」は、当団のために書かれ2001年5月に完成、11月神戸にて世界初演を行なった。

「エレジー」とは「悲歌」を意味しており、9・11米国同時多発テロの直後でもあったことから、多くの方々に9・11や1995年神戸淡路大震災被災者への鎮魂歌と受け取られたようだった。その後、この曲は世界各地で作曲者自身の指揮により繰り返し演奏され、2005年に氏が所属するASCAP(アスカップ、全米作曲家・作詞家・出版社協会)から、この曲の欧州での演奏活動が評価されASCAP PLUS Award(全米作曲家賞)を受賞した。ルネサンス風5度進行の和声の中で日本的な旋律が縫っていき親しみやすい曲である。

吉田秀和氏は「バロックは建築的動力学(ダイナミズム)の音楽で、ロマン派は感情的力学の音楽だ。そうして現代は、感情的であるよりは、むしろ実存的力学の時代なのだ。」(『LP300選』)と書いているが、本日のプログラムはそれを確かめるのにもいい機会かも知れない。

今回は作曲者ご自身に指揮を戴く光栄を得、その指揮棒から紡ぎ出される音楽にさらに新たな発見があるに違いない。尚、アパート氏のプロフィールは次ページをご参照頂きたい。

## ■ W. A. モーツァルト セレナード ト長調 K. 525 「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)の数多くの作品の中で、最も有名で古今東西無数の聴衆を楽しませたこの曲は、モーツァルト31歳ウィーン定住6年目の8月に一気に書き上げられた。《神童》モーツァルトの円熟した作品群はその天上的な響きからギリシャ神話にたとえられ、最後の41番シンフォニーは「ジュピター」と呼ばれることになった。「小夜曲」と自ら表題したこの簡潔な、そして同じく完璧な古典美に輝く音楽は、ジュピター(ゼウス)の宮殿で大堅琴を奏でるアポロンにたとえても良いのだろう。弦楽器を手にする者にとっては演奏する喜び、また難しき奥深さに直接触れる試金石のような曲でもある。モーツァルト生誕250年であった昨年、この曲は世界中で特に多く演奏されたのではないだろうか。

尚、モーツァルトによる自作総目録によると、第1楽章と第2楽章の間にもう一つのメヌエットがあったはずであるが、ミロのヴィーナスの両腕が誰にも再現できないように、失われたそのメヌエットを再現することも想像することも、モーツァルト以外誰にもできないのである。

I. アレグロ

II. ロマンツェ アンダンテ

III. メヌエット アレグレット

IV. ロンド アレグロ

## ■ E. グリーク 「ホルベアの時代から」—古い様式による組曲 作品40

エドヴァルド・グリーク(1843-1907)は、ノルウェーを代表する民族主義的ロマン派の作曲家で「ペール・ギユント」、ピアノ協奏曲、歌曲などが有名。今年、没後100年にあたる。

この作品の標題は、近世デンマーク及びノルウェー文学の父と呼ばれるホルベア男爵(Ludwig Holberg 1684-1754)の生誕200年祭のために書かれ(当時デンマーク、ノルウェーは同君連合国の体制であった)、そのホルベアの生きていた時代すなわちバロック時代の様式による組曲ということを表わしている。前奏曲はスカラッティ、サラバンドとガヴョットはクーブランやラモー、アリアはバッハ、リゴードンはヘンデルのスタイルをとっているようだと言野泉氏は解説している。グリーク41歳の作曲で原曲はピアノ独奏用である。すぐ翌年弦楽合奏版が初演されており、弦楽合奏にとって大切なレパートリーのひとつになっている。グリークの音楽にはスカンディナヴィアのきびしい自然、フィヨルド、白夜など北欧の気と光が結晶しているのだろう、主題の一つ一つが独特の抒情に満ちている。動機の理論的發展はあまり見られないが、作曲者の感情が直接表現されることで情緒による曲の展開が魅力となっている。前奏曲 アレグロの律動的な刻みの上に彗星のように長く響く旋律が重なる曲の冒頭から、われわれは一気に北欧世界へと誘われる。

I. 前奏曲 アレグロ・ヴィヴァーチェ

II. サラバンド アンダンテ

III. ガヴョットとミュゼット アレグレット

IV. アリア アンダンテ・レリジョーソ

V. リゴードン アレグロ・コン・プリオ

R.O.

### ■ 酒井睦雄 Mutsuo Sakai 指揮、音楽監督

桐朋学園高等学校音楽科を経て1971年桐朋学園大学卒業。指揮を斎藤秀雄、秋山和慶両氏に、クラリネットを北爪利世、二宮和子、F. フックス各氏に師事。71年より相愛オーケストラ指揮者、77年ザルツブルクにてO. スイトナー氏に師事。同年、東京にてS. チェリビダック氏のゼミナールに参加。2001年には芦屋室内合奏団を率いてドイツのバンベルクにてバンベルク交響楽団団員とともにニューイヤーコンサート、ドレスデンにてフラウエン教会落成記念コンサート等を行い好評を博す。2005年、第19回京都芸術祭音楽部門 京都府知事賞受賞。現在、相愛大学教授として音楽専門家の育成にあたる傍ら、74年より芦屋室内合奏団音楽監督、岐阜交響楽団常任指揮者、90年より高知室内管弦楽団指揮者をつとめる等、アマチュア合奏団の発展にも尽力している。

### ■ ドナルド L アパート Donald L. Appert 作曲、指揮

ニューイングランド音楽院にて音楽修士号を、カンザス大学にてDMA(音楽芸術博士号)を取得。リッカルド・ムーティに指揮法を師事。現在米国ワシントン州クラーク・カレッジの音楽学部主任教授、同カレッジオーケストラの音楽監督、オレゴン州オレゴン・シンフォニエッタオーケストラ音楽監督。米国・欧州各地で客演指揮し、地元各紙で「優雅で気品溢れる演奏」「本来の豊かな旋律を最も効果的に表現」「新鮮で詩的な響き」「真摯で慎重な精確さ」などと好評を得る。2006年11月米国にて五嶋龍氏と共演。今シーズンは日本に加え、トルコ、ルーマニア、エルサルバドルでも客演指揮予定。

作曲も高い評価を得ており、2005年の「弦楽のためのエレジー」に続き、2006年「Prism(プリズム)」でもASCAP PLUS Award(全米作曲家賞)を受賞。アパート氏の作品のほとんどは出版されており、その多くは氏のウェブサイトで見ることができる。 <http://pixeldreams.com/appert.html>

### ■ 芦屋室内合奏団

ヴァイオリン	:	鳥丸安雄 (コンサートマスター)	伊藤耕平	勝部 操
		戸倉啓子	福永千江子	藤本恭子
		三村誠子	青柳 良	大内隆一
		田島光子		喜多智佐子
ヴィオラ	:	福永精一	伊藤恵子	音村圭一郎
チェロ	:	鳥丸直子	堀田一之	宮崎晴夫
コントラバス	:	赤松里美 (客演)		
チェンバロ	:	小津久子		

当合奏団は1965年、当時の神戸大学、甲南大学の学生オケの首席奏者と初代指揮者 中島良能(現湘南エールアンサンブル音楽監督、ルーマニア国立ボトシャニフィル首席客演指揮者)等が芦屋市の故橋本宗夫氏宅に集まり、スタートした。1974年からは現相愛大学 酒井睦雄教授の指導を受け、2001年にはドイツ公演でバンベルク交響楽団員とニューイヤーコンサートを行った。これまでに宮本政雄、毛利伯朗、延原武春、斉藤達男、鈴木雅明、各氏にご共演いただく。40年に亘る演奏活動で取り上げた作品は、バッハ、ヘンデル、ヴァイマルディをはじめとするバロック音楽、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンからロマン派、現代音楽まで多数にのぼる。木管楽器、金管楽器奏者、また歌手の方々との共演も積極的に行ってきた。

毎月2回、日曜日、練習場に各々愛器を提げて集まり、練習時間は真剣そのもの、休憩時間はお茶とお菓子里に話が弾む。毎年秋には合宿。音楽をとことん楽しむ団員ぞろいの合奏団である。